

# 三好市「旧東祖谷山村」の 生活構造と生活意識

社会班（徳島社会学会）

近藤 孝造\*<sup>1</sup> 長澤 寛二\*<sup>2</sup> 桂 啓人\*<sup>3</sup>

**要旨：** 旧東祖谷山村住民の生活構造や生活意識をアンケート調査により分析した。住民の高齢化は著しく進んでおり年齢層が上がるにつれて、健康状態・経済上の不安が高まり、家族形態も向老層を境に親子同居から夫婦のみさらに独居へと変化し、家族規模も縮小する。社会関係では、親しい友人・親しい親戚がある場合に地元への貢献意欲が高まり、自分の存在意義を肯定的にとらえ、集団参加数も増加する傾向にある。このことからソーシャルネットワークが密なことが重要であることがわかる。生活意識においては、経済的に安定し豊かであること、子どもがいて子や親と同居していること、参加集団数が多いことが自己肯定感を高めていることが確認できた。

**キーワード：** 高齢化、生活構造、生活意識、ソーシャルネットワーク、自己肯定感

## 1. はじめに

21世紀に入り、「平成の大合併」によって全国で市町村の合併が進み徳島県においても、平成18年3月1日、6町村が合併して三好市が誕生した。これにより旧東祖谷山村（以下では東祖谷と表記する）は行政単位としては存在しなくなった。東祖谷は、平家伝説を有し古くから栄えてきた村である。農林業やそばの生産を中心に経済を営み、広大な面積を有する散村である。東祖谷は、総面積228.6km<sup>2</sup>、人口1,929人、人口密度8.4人/km<sup>2</sup>の過疎化の著しい山村である。われわれの7年前の調査では県内50市町村中6番目の過疎地域であった。<sup>1)</sup>

われわれは、東祖谷の住民の生活構造や生活意識、すなわち、どう生活しているかを記録に残しておくことは学問的に価値があると考えた。本論文では、住民へのアンケート調査により、東祖谷の住民の基本的・客観的な生活像を示した。次いで、東祖谷の人々がどのような「社会関係」の下に生活している

かを明らかにするため、家族関係、友人関係、親戚関係を調査した。最後に、自己肯定観を探るとして地域住民がどのような意識を持って日々生活しているのかを分析した。

## 2. 調査の概要

### 1) 調査対象地域の状況と調査実施概要

統計情報（徳島県統計調査課編）によると、平成17年の東祖谷の人口は1,929人、世帯数908世帯である。平成12年の調査と比較すると、人口が378人（減少率16.4%）、世帯数が128世帯（同12.4%）減少している。この人口減少率の高さは、全国の町村の中で第8位に位置し、県内35市町村（平成17年4月現在）中第1位である。このことより、東祖谷が全国的にも最も急速に過疎化が進行している地域のひとつであることがわかる。

また、人口を年齢別にみると、15歳未満人口（年少人口）は169人（人口の8.8%）、15歳以上65歳未満人口（生産年齢人口）は905人（同46.9%）、65歳

\* 1 徳島工業短期大学 \* 2 徳島県立東工業高等学校 \* 3 徳島県教育委員会学校政策課

以上人口（老年人口，本稿では高齢層）は855人（同44.3%）である。老年人口の割合は，県内35市町村（平成17年10月1日現在）中，上勝町の48.5%に次いで県内2番目で，全国平均の20.1%よりはるかに高く，東祖谷は高齢化が進んだ地域であることが確認できる。<sup>2)</sup>この調査の実施概要は表1に示したとおりである。

表1 調査実施概要

調査地域	徳島県三好市「旧東祖谷山村」
調査対象	郵送300小中学校依頼109
標本数	409
標本抽出法	郵送分は無作為抽出(50歳以上)，小中学校依頼分は全数調査
調査方法	質問紙法（配表調査法）
調査期日	平成18年6月～7月
回収標本数	201（49.1%）

## 2) 調査対象者の属性

調査対象者の属性について，以下に示しておく。年齢層別としては，44歳以下を青・壮年層，45歳から54歳以下を中年層，55歳から64歳以下を向老層，65歳以上を高齢層とした。調査票回収数201票の内，不明の11票を除くと青・壮年層は23.2%，中年層は21.1%，向老層は22.1%，高齢層は33.6%であった（表2）。以下では，子どもの有無と同別居を除いて調査対象者の基本的属性を年齢層ごとに見ていく。なお，小中学校の保護者にも調査を依頼し，協力していただいたので，回答者の年齢層は母集団である東祖谷の高齢者率（44.3%）より若くなっている。

表2 年齢層別人数割合

	人数（人）	割合（%）
青・壮年層（44歳以下）	44	23.2
中年層（45歳～54歳）	40	21.1
向老層（55歳～64歳）	42	22.1
高齢層（65歳以上）	64	33.6
合計	190	100.0

### (1) 性別

調査対象者の男女比は，全体では男性43.4%，女性56.6%であった。年齢層別では，中年層以上の年齢層では男女比はほぼ同数であるが，青・壮年層では81.8%が女性で，年齢層間の男女比には有意差が

認められた（表3： $p < 0.01$ ）。これは，小中学校にも調査を依頼したため，回答者に母親が多かったためだと考えられる。

表3 性別 \*\* (%)

	男	女
青・壮年層	18.2	81.8
中年層	52.5	47.5
向老層	50.0	50.0
高齢層	51.6	48.4
合計	43.4	56.6

注 \*は $\chi^2$ 自乗検定にて5%水準で有意，\*\*は1%水準で有意，\*\*\*は0.1%水準で有意。

### (2) 健康状態

健康状態に関しては，全体では「健康である」がもっとも多く60.7%，「無理できない」が29.5%，「病気」が9.8%であった。

年齢層別では，「健康である」が青・壮年層86.4%，中年層80.0%，向老層64.2%，高齢層29.7%であり，年齢層が上がるほど「健康である」の割合は減少している。特に高齢層では，「健康である」の割合（29.7%）が他の年齢層と比べて著しく低く際立っている。向老層以下ではすべての層で，「健康である」が回答者の過半数を占めているのに対し，高齢層では「無理できない」がもっとも多く，「病気」も20.3%となっている。健康状態は向老層を境に逆転し，高齢層で大きく悪化していることがわかる（表4： $p < 0.001$ ）。

表4 健康状態 \*\*\* (%)

	健康である	無理できない	病気
青・壮年層	86.4	9.1	4.5
中年層	80.0	17.5	2.5
向老層	64.2	31.0	4.8
高齢層	29.7	50.0	20.3
合計	60.7	29.5	9.8

### (3) 職業

職業に関しては，全体では「無職」が40.1%で最も多かった。以下「会社員」が25.5%，「農林業」と「その他」が9.9%，「自営業」が8.3%，「公務員」が6.3%の順であった。年齢層別では，高齢層の78.1%が「無職」であり，他の年齢層を大きく引き離して

いる ( $p < 0.001$ )。青・壮年層の25.0%も「無職」であるが、これは青・壮年層の8割が女性であり、主婦層が含まれていることが原因であると考えられる(表5)。

表5 職業 \*\*\* (%)

	農林業	会社員	自営業	公務員	その他	無職
青・壮年層	0.0	45.4	2.3	11.4	15.9	25.0
中年層	5.0	45.0	12.5	10.0	15.0	12.5
向老層	19.5	22.0	17.1	7.3	14.6	19.5
高齢層	14.1	3.1	4.7	0.0	0.0	78.1
合計	9.9	25.5	8.3	6.3	9.9	40.1

(4) 暮らし向き

暮らし向きに関しては、全体では「豊かである」が9.9%、「どちらともいえない」が56.6%、「豊かではない」が33.5%であった。年齢層別では、「豊かではない」と答えた割合は、中年層(25.0%)や青・壮年層(25.0%)より高齢層(39.7%)と向老層(41.5%)に多く、年齢層が上がるに従って暮らし向きは厳しくなっている(表6:  $p < 0.05$ )。

表6 暮らし向き \*(%)

	豊かである	どちらともいえない	豊かではない
青・壮年層	9.1	65.9	25.0
中年層	17.5	57.5	25.0
向老層	9.8	48.7	41.5
高齢層	6.3	54.0	39.7
合計	9.9	56.6	33.5

(5) 家族形態

家族形態に関しては、全体では「親や子と同居」が53.6%で半数以上を占めている。以下「夫婦のみ」が34.7%、「一人暮らし」が11.7%であった。高齢層の21.9%が「一人暮らし」であり、53.1%が「夫婦のみ」の生活をし、親や子と同居している高齢者は4分の1でしかない。「一人暮らし」や「夫婦のみ」の生活は年齢層が上がるに従って増加している(表7:  $p < 0.001$ )。

(6) 子どもの有無と同別居

子どもの有無に関しては、「子どもはいない」は9.5%であり、「子どもがいる」は90.5%であった(表8-1)。また、子どもがいる人に子どもとの同別居

表7 家族形態 \*\*\* (%)

	一人暮らし	夫婦のみ	親や子と同居
青・壮年層	0.0	4.5	95.5
中年層	0.0	23.7	76.3
向老層	14.3	45.2	40.5
高齢層	21.9	53.1	25.0
合計	11.7	34.7	53.6

表8-1 子どもの有無

	人数(人)	割合(%)
子ども無	19	9.5
子ども有	182	90.5
合計	201	100.0

の状況に関して質問したところ(複数回答)、子どもは「遠くで別居(三好市外)」が63.7%で最も多く、次いで「同居」が45.1%、「近くで別居(三好市内)」が34.1%あった(表8-2)。

表8-2 子どもとの同別居(複数回答) (%)

同居	近くで別居	遠くで別居	累計
45.1	34.1	63.7	142.9

3. 社会関係の分析

前章では、東祖谷住民の基本的・客観的な生活像を示した。住民の社会関係や地域での社会参加の状態を知ることは、住民の具体的な生活を知るうえできわめて重要である。そこで本章では東祖谷住民の社会関係を分析する。なお、ここでは社会関係として「人間関係」、特に各人が持っている「親しい人間関係」を調査した。具体的には、「とてもうれしいことがあったとき、そのことを早く知らせたいような、親しい友人(親戚)はいますか」の質問に答えてもらった。

表9に「人間関係規模」の平均値を示したが、調査対象者の平均的な家族人数は約3人(2.86人)、親しい友人は約4人(3.51人)、親しい親戚も約4人(4.41人)であった。

表9 人間関係規模平均値

	(人)
家族人数	2.86
親しい友人数	3.51
親しい親戚数	4.41

1) 親しい友人との関連

親しい友人の有無は、その人のソーシャルネットワークを知るうえで重要であるので、親しい友人の有無とその地域、人数について調査した。親しい友人がいると答えた人は79.7%で、ほとんどの人に親しい友人がいると考えられる。友人の分布を地域別に見ると、東祖谷内の友人が80.9%と最も多く、次いで三好市外の友人が43.6%、三好市内の友人が28.0%であった（複数回答）。親しい友人の平均人数は3.51人（最大49人）で、東祖谷内は2.0人（最大13人）、三好市外は1.0人（最大27人）、三好市内は0.5人（最大10人）であった。

親しい友人の有無に基づいて他のアンケート項目との関係をクロス集計で分析してみた。有意差があったのは、「親しい親戚の有無」、「地域貢献意欲」、「存在意義」、「集団参加数」の4項目であった。以下では、これらの項目について検討していく。

(1) 親しい友人と親しい親戚との関係

「親しい友人」の有無と「親しい親戚」の有無との関係を見てみた（表10）。全体では「親しい親戚がいる」割合は84.6%で、「親しい親戚はいない」割合は15.4%であった。親しい親戚がいる人が大多数を占めている。

「親しい友人がいる」人の91.0%が「親しい親戚がいる」と答えており、逆に「親しい友人はいない」人の41.0%が「親しい親戚はいない」と答えている。親しい友人がいることと親しい親戚がいることには明らかに相関関係があるといえる（ $p < 0.001$ ）。

表10 親しい友人と親しい親戚との関係

*** (%)		
	親しい親戚有	親しい親戚無
親しい友人有	91.0	9.0
親しい友人無	59.0	41.0
合計	84.6	15.4

(2) 親しい友人と地域貢献意欲との関係

「あなたは、住んでいる地域のためになることをして、何か役立ちたいと思いますか」という問いで、地域貢献意欲の有無を調査した（表11）。全体では「そう思う」と答えた人は41.3%であり、「ある程度そう思う」が41.9%で、両者の合計は8割以上であ

り、何らかの形で地域に貢献したいと思っている人が非常に多い。

その内容を少し詳しくみると、「親しい友人がいる」では、最も多い回答が「そう思う」(44.5%)であり、次に多いのは「ある程度そう思う」(43.9%)である。何らかの意味で積極的に地域に貢献する意欲のある人が圧倒的多数を占める。他方、「親しい友人はいない」では、1/3以上が「そう思わない」(35.0%)と答えており、友人の有無が地域貢献意欲に関係していることが明らかとなった（ $p < 0.01$ ）。

表11 親しい友人と地域貢献意欲との関係

** (%)			
	そう思う	ある程度 そう思う	そう思わない
親しい友人有	44.5	43.9	11.6
親しい友人無	30.0	35.0	35.0
合計	41.3	41.9	16.8

(3) 親しい友人と存在意義との関係

「自分はこの世の中でなくてはならない存在だと思いますか」との間で、自分の存在意義を調査した。全体では「あまりそう思わない」が最も多く、30.2%であった。続いて「そう思う」(28.6%)、「ややそう思う」(26.1%)の順であるが、三者はよく似た比率である（表12）。

表12 親しい友人と存在意義の関係 \*

* (%)				
	そう思う	ややそう思う	あまりそう 思わない	そう思わない
親しい友人有	30.1	30.1	26.3	13.5
親しい友人無	20.0	12.5	47.5	20.0
合計	28.6	26.1	30.2	15.1

親しい友人の有無との関係でみると、「親しい友人がいる」は、「そう思う」、「ややそう思う」が各30.1%で、存在意義を肯定的にとらえている人（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）が6割を占めている。他方、「親しい友人はいない」は「あまりそう思わない」が47.5%で半数近くを占め、自分の存在意義を肯定的にとらえている人は、3人に1人しかいない。親しい友人の存在と自分の存在意義が関係していると言える（ $p < 0.05$ ）。

#### (4) 親しい友人と参加集団数との関係

親しい友人の有無と参加集団数の関係を分析した(表13)。全体でのピークは「3～5個」(37.4%)、「1～2個」(34.3%)であったが、親しい友人の有無によって、はっきりとした差がみられた。

すなわち、「親しい友人がいる」の場合、「参加集団数」のピークは「3～5個」で半数近く(45.2%)を占め、15.3%もが「6個以上」と多くの集団に参加している。一方、「親しい友人がいない」では、「1～2個」の参加集団数が60%近くを占め、集団参加数が「無し」も27.5%いる。親しい友人がいる場合に参加集団数が明らかに多くなっており( $p < 0.001$ )、集団参加によって友人ができるという相互関係がうかがえる。

表13 親しい友人と参加集団数との関係

	*** (%)			
	無し	1～2個	3～5個	6個以上
親しい友人有	10.8	28.7	45.2	15.3
親しい友人無	27.5	57.5	10.0	5.0
合計	15.4	34.3	37.4	12.9

#### (5) 参加集団の種類

具体的に、どのような集団に参加しているのかを質問した(複数回答)。

40%以上の人に参加している集団は「氏子・檀家・祭礼集団」(45.3%)、「同窓会・同郷会など」(44.8%)、

表14 参加集団の種類(複数回答)

No	カテゴリー名	%
1	氏子・檀家・祭礼集団	45.3
2	同窓会・同郷会など	44.8
3	町内会・自治会など	44.2
4	趣味・娯楽・スポーツ・学習サークルなど	39.0
5	PTA・子ども育成会など	34.9
6	老人クラブなど	27.9
7	地域婦人会・青年団など	25.6
8	福祉ボランティア・協議会など	20.3
9	農協・商工会など同業団体	11.6
10	生協・消費者・住民運動団体など	11.0
11	政党・政治団体など	10.5
12	宗教団体など	6.4
13	遺族会・戦友会など	5.2
14	その他	3.5
	累計 (%)	330.2

「町内会・自治会など」(44.2%)で、これらは、比較的幅広い年齢層の人が参加する集団であることが指摘できよう。「趣味・娯楽・スポーツ・学習サークルなど」にも多くが参加している(39.0%)。

次には、子育て期にある青壮年層・中年層が参加する「PTA・子供育成会など」(34.9%)が多く、高齢層が参加する「老人クラブなど」にも多くが参加している(27.9%)。「地域婦人会・青年団など」も25.6%が参加している。これらには、熱心に活動がなされるが、参加する年齢層などが限定されやすいという共通点がある。

#### 2) 親しい親戚との関連

親しい友人の次に、ソーシャルネットワークのもう一つの項目として親しい親戚の有無とその地域、人数について調査した。まず、親しい親戚がいる人は、84.6%で、ほとんどの人に親しい親戚がいるが、地域別に見ると、東祖谷内の親戚が75.3%と最も多く、次いで三好市外の親戚が59.6%、三好市内の親戚が25.9%であった(複数回答)。次に親しい親戚の平均人数は4.4人(最大30人)で、東祖谷内は2.2人(最大23人)、三好市外は1.7人(最大11人)、三好市内は0.5人(最大7人)であった。

親しい親戚の有無に基づいて他のアンケート項目との関係をクロス集計で分析した。有意差があったのは、「地域貢献意欲」、「地域への愛着」、「生きがい」、「存在意義」、「参加集団数」の5項目であった。以下では、これらの項目について検討していく。

#### (1) 親しい親戚と地域貢献意欲との関係

「あなたは、住んでいる地域のためになることをして、何か役立ちたいと思いますか」という問いで、地域貢献意欲の有無を調査した。「親しい親戚がいる」の場合は、「そう思う」と答えた人は46.0%と半数近いが、「親しい親戚がいない」の場合は13.3%である(表15)。親しい親戚がいる場合のほうが、地

表15 親しい親戚と地域貢献意欲との関係

	*** (%)		
	そう思う	ある程度 そう思う	そう思わない
親しい親戚有	46.0	41.7	12.3
親しい親戚無	13.3	46.7	40.0
合計	41.3	41.9	16.8

域貢献意欲が高いと言える ( $p < 0.001$ )。

(2) 親しい親戚と地域への愛着との関係

「あなたは、今住んでいる地域が好きですか」という問いで、「地域への愛着」の有無を調査した。全体では、地域への愛着がある(「好き」と「やや好き」を合計したもの)人は93.5%と非常に多く、郷土愛の強いことが確認できる。

「親しい親戚がいる」では、東祖谷が「好き」と答えた割合が75.0%で、「親しい親戚がいない」の43.3%より高率であった(表16:  $p < 0.001$ )。親しい親戚がいる場合のほうが、地域への愛着が強い傾向にある。

表16 親しい親戚と地域への愛着との関係

\*\*\* (%)

	好き	やや好き	嫌い
親しい親戚有	75.0	20.7	4.3
親しい親戚無	43.3	36.7	20.0
合計	70.0	23.5	6.5

(3) 親しい親戚と生きがいとの関係

「あなたは、今、生きがいのある生活をしてますか」という問いで、「生きがい」を調査した(表17)。全体では「生きがいがある」が35.4%で最も多く、続いて「やや生きがいがある」が34.3%、「あまり生きがいがない」が22.2%、「生きがいはない」が8.1%であった。「親しい親戚がいる」の場合は、「生きがいがある」が36.6%だが、「親しい親戚がいない」の場合は20.0%である。「親しい親戚がいない」では、生きがいを感じていない(「あまり生きがいはない」と「生きがいはない」を合計したもの)が53.3%であった。「親しい親戚がいる」のほうが、「親しい親戚がいない」より生きがいを感じている割合が高いと言える ( $p < 0.05$ )。

表17 親しい親戚と生きがいとの関係 \* (%)

	生きがいがある	やや生きがいがある	あまり生きがいはない	生きがいはない
親しい親戚有	36.6	36.6	20.7	6.1
親しい親戚無	20.0	26.7	33.3	20.0
合計	35.4	34.3	22.2	8.1

(4) 親しい親戚と存在意義との関係

「親しい親戚がいる」では、既述の自分の存在意

義の質問に関して「そう思う」の割合は31.7%と多くはないが、「親しい親戚がいない」では6.7%とさらに少ない(表18)。存在意義を肯定的にとらえている人(「そう思う」と「ややそう思う」の合計)になると、「親しい親戚がいる」では58.5%と半数を超えるが、「親しい親戚はいる」では33.4%と3人に1人であった。親しい親戚がいる場合のほうが、自分の存在意義を肯定的に感じていると言える ( $p < 0.05$ )。

表18 親しい親戚と存在意義との関係 \* (%)

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
親しい親戚有	31.7	26.8	29.3	12.2
親しい親戚無	6.7	26.7	39.9	26.7
合計	28.6	26.1	30.2	15.1

(5) 親しい親戚と参加集団数との関係

参加集団数のピークは、「親しい親戚がいる」では「3～5個」(42.4%)であり、「親しい親戚がいない」では「1～2個」(50.0%)であった。参加集団数が「無し」と回答した割合は、「親しい親戚がいる」では10.9%であったが、「親しい親戚がいない」では30.0%と「親しい親戚がいる」の3倍であった。親しい親戚がいる場合のほうが、参加集団数が多いといえる ( $p < 0.001$ )。

表19 親しい親戚と参加集団数との関係

\*\* (%)

	無し	1～2個	3～5個	6個以上
親しい親戚有	10.9	31.5	42.4	15.2
親しい親戚無	30.0	50.0	16.7	3.3
合計	15.4	34.3	37.4	12.9

この章では、東祖谷住民の親しい人間関係を中心に分析した。親しい友人や親しい親戚がある場合に地元への貢献意欲が高まり、自分の存在意義を肯定的にとらえ、集団参加数も増加することから、ソーシャルネットワークが密であることと、生活に対する意欲や自己評価との間に相関関係があることが確認できた。

#### 4. 東祖谷住民の生活意識の分析

##### —— 自己肯定感を中心に ——

本章では東祖谷住民の生活意識を分析する。生活意識の分析には生活の満足感や人生の充実度が特に重要だと考え、これらを総合したものを自己肯定感と定義し、これを評価することとする。東祖谷住民の自己肯定感を測るために、既述の「今、生きがいのある生活をしていますか」という質問と「自分はこの世の中でなくてはならない存在だと思いますか」の質問を活用し、両方共に「そう思う」、「ややそう思う」と答えた人を自己肯定感の「高得点者」、それ以外の人を「低得点者」と分類した。「高得点者」は36.5%、「低得点者」は63.5%であった(表20)。

表20 自己肯定感 (%)

高得点者	36.5
低得点者	63.5

自己肯定感の高得点、低得点の2グループに分け、数量化理論2類による分析をおこなった。判別適中率は80.7%であった。

「レンジ表」(表21)は、各項目(アイテム)が高得点者と低得点者とを判別するのに寄与した大きさとその順位を示している。「カテゴリスコア表」(表22)の各カテゴリ(選択肢)はプラスの数字が大きいほど各カテゴリが自己肯定感を高めることに寄与

表21 自己肯定感への影響(レンジ表)

項目名	レンジ	
職業	1.82	1位
暮らし向き	1.37	2位
子どもの有無	1.06	3位
参加集団数	0.93	4位
家族形態	0.59	5位
地域貢献意欲	0.58	6位
親しい親戚の有無	0.56	7位
年齢層	0.53	8位
同居している子ども	0.52	9位
地域の将来像	0.51	10位
遠くで別居している子ども	0.48	11位
地域への愛着	0.41	12位
性別	0.35	13位
健康状態	0.31	14位
近くで別居している子ども	0.29	15位
定住意志	0.09	16位
親しい友人の有無	0.06	17位

表22 自己肯定感への影響(カテゴリスコア表)

項目名	カテゴリ名	n	カテゴリスコア
職業	農林業	18	0.34
	会社員	46	0.11
	自営業	15	-0.01
	公務員	11	1.14
	その他(パート等)	18	-0.68
	無職	63	-0.18
暮らし向き	豊かである	19	1.10
	どちらともいえない	96	-0.06
	豊かではない	56	-0.28
子どもの有無	いない	15	-0.97
	いる	156	0.09
参加集団数	無し	21	-0.31
	1~2個	60	-0.27
	3~5個	67	0.13
	6個以上	23	0.62
家族形態	一人暮らし	20	-0.02
	夫婦のみ	56	-0.37
	親や子と同居	95	0.22
地域貢献意欲	そう思う	72	0.26
	ある程度そう思う	71	-0.31
	そう思わない	28	0.11
親しい親戚の有無	親しい親戚いる	144	0.09
	親しい親戚はいない	27	-0.47
年齢層	青・壮年層(~44歳)	37	-0.11
	中年層(45歳~54歳)	38	0.32
	向老層(55歳~64歳)	38	0.10
	高齢層(65歳以上)	58	-0.21
同居している子ども	いない	75	-0.29
	いる	96	0.23
地域の将来像	良くなる・やや良くなる	22	-0.02
	やや悪くなる	67	0.28
	悪くなる	82	-0.22
遠くで別居している子ども	いる	101	-0.20
	いない	70	0.29
地域への愛着	好き	120	-0.01
	やや好き	41	-0.06
	嫌い	10	0.35
性別	男	78	-0.19
	女	93	0.16
健康状態	健康である	105	-0.05
	無理できない	52	0.15
	病気	14	-0.16
近くで別居している子ども	いる	48	0.21
	いない	123	-0.08
定住意志	定住したい	132	0.02
	移りたい	39	-0.07
親しい友人の有無	親しい友人いる	137	0.01
	親しい友人はいない	34	-0.05

したことを示し、逆にマイナスの数値が大きいほど自己肯定感を低くすることを示している。

分析の結果、最も自己肯定感を高めるのに貢献している項目は、「職業」であった。「公務員」・「農林業」のカテゴリのカテゴリスコアが大であり、「公務員」・「農林業」に従事していることがプラス（自己肯定感を高める）に貢献している。「無職」や「その他」のカテゴリがマイナス（自己肯定感を低める）に作用している。2番目には「暮らし向き」が「豊かである」がプラスに貢献しており、経済的な安定や豊かさが自己肯定感の増加に大きな影響を与えている。

続いて家族関係に関するものが並び、「子どもがいる・いない」（3位）では「子どもがいる」こと、「家族形態」（5位）では「親や子と同居」していることがプラスに貢献している。「子どもがいない」、「親しい親戚がいない」のカテゴリのマイナスの数値が大きいことが注目される。

社会参加を示す項目では、「参加集団数」が4位に位置している。参加集団数が「多い」ことがプラスに貢献しており、3個以上のカテゴリが参加者の自己肯定感を高めている。「年齢層」の項目では、「高齢層」と「青・壮年層」のカテゴリがマイナスであり、逆に、その間に位置する「中年層」、「向老層」がプラスであり、高い自己肯定感を有している。

「性別」、「健康状態」、「親しい友人の有無」などの項目は今回の検討では自己肯定感とはあまり関係していないと思われる。

## 5. むすびにかえて

われわれの調査で明らかになったことは、次のとおりである。

東祖谷住民の平均年齢は54.8歳であり（徳島県平均45.3歳）高齢化が著しく進んでいる。われわれの分析では、年齢層が上がるにつれて、健康状態・経済上の不安が高まり、家族形態も向老層を境に親子同居から夫婦のみ、さらに独居へと変化し、家族規

模も縮小する。子育て期間が終わると（向老層以降）、子どもたちは東祖谷を去っていくという厳しい過疎の状況が示されている。

社会関係で見ると、親しい友人の有無と親しい親戚の有無の両方に関連するのは、地元への「貢献意欲」、「存在意義」、「集団参加数」の3項目である。親しい友人・親しい親戚がある場合に地元への貢献意欲が高まり、自分の存在意義を肯定的にとらえ、集団参加数も増加する傾向にあった。このことからソーシャルネットワークが密なことが重要であることがわかる。

生活意識においては、自己肯定感に関連するのは、経済的な安定や豊かさを示す「職業」、「暮らし向き」の項目、家族関係に関するものとして「子どもの有無」、「家族形態」、地域社会での活動状況である「参加集団数」であった。経済的に安定し豊かであること、子どもがいて子や親と同居していること、参加集団数が多いことが自己肯定感を高めていることが確認できた。

最後に、本調査にご協力いただいた方ならびに三好市教育委員会東祖谷分室、各学校の関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

## 引用文献

- 1) 桂啓人・長澤寛二・近藤孝造（2001）：相生町の過疎実態と住民意識。『総合学術調査報告 相生町 阿波学会紀要 第47号』、阿波学会・徳島県立図書館、312頁。
- 2) 徳島県統計調査課編（2006）：『統計情報 No.275 10・11月号』、5～10頁。総務省統計局ホームページ『平成17年国勢調査』。

## 参考文献

- 山本努著（1996）：『現代過疎問題の研究』、恒星社厚生閣。
- 杉岡直人著（1990）：『農村地域社会と家族の変動』、ミネルヴァ書房。
- 前田信彦著（2006）：『アクティブ・エイジングの社会学—高齢者・仕事・ネットワーク』、ミネルヴァ書房。
- 金子勇編著（2002）：『高齢化と少子社会』講座社会変動8、ミネルヴァ書房。
- 直井道子著（2001）：『幸福に老いるために—家族と福祉のサポート』、勁草書房。